1964 年東京オリンピック成功を支えた大島鎌吉の偉業

大島鎌吉

1. はじめに

1964 年の東京オリンピックに大島鎌吉という人が、どれだけ多くの功績を残したかを皆さんはご存知ですか。私達は大島鎌吉という人物をもっと知っておく必要がありそうです。NHK 大河ドラマは「いだてん」でした。前編は日本で初めてオリンピックに参加した金栗四三（かなくりしそう）、後編は東京オリンピックの招致に力を尽くした田畑政治（たばたまさじ）を中心にドラマは展開されました。しかし、その陰に隠れるように、1964 年の東京オリンピックの成功には金沢市出身の大島鎌吉（おおしまけんきち）も大きな役割を果たしています。その大島鎌吉の業績については知る人は少ないようです。

２．大島鎌吉賞

毎年 3 月、金沢市陸上競技協会がその年度に立派な記録を出した金沢市内の小中学生に「大島鎌吉賞」という賞を授与しています。その受賞式の次第には大島鎌吉のプロフィールが次のように書かれています。

「明治 41 年　金沢市で出生　ロサンゼルスオリンピック三段跳び　銅メダル・・・第 18 回東京オリンピック日本選手団団長・・・戦後、五輪を通じた平和運動、青少年育成運動を天職とするとともに東京オリンピックの誘致運動に尽力される・・・」

３．生い立ち

大島は 1908 年（明治 41）11 月 10 日、金沢市白銀町で履物商の長男として誕生します。現在、その建物はありませんが、木造三階建ての立派な建物だったそうです。

出生時は「謙吉」と名付けられたそうですが、両親は跡取り息子の将来と商売繁盛を願って「鎌吉」と出生届を出します。それで、「けんきち」ではなく「かまきち」と呼ぶ人も多いのですが、本人は気にしなかったようです。

瓢箪町小学校（現：明成小学校）時代の大島は大変活発な少年で、いつも走り回っていたそうです。冬になると「こしきだ」（除雪するための板）で雪を叩いて固めて走るほど、走ることが大好きだったそうです。

実は大島は非常に多くの論文、書物を残しているのですが、自分のことを語った資料というのは全くといっていいほどありません。ですから、人から「大島とはこんな人だ」ということを聞いて取材する他、大島を知ることができないそうです。

４．金沢商業高校時代

大島は 1923（大正 12）年金沢商業学校（現：県立金沢商業高等学校）に進学します。当時は中学校と高校を合わせた旧制中等学校で、校舎は彦三にありました。

大島は陸上競技部に所属し、陸上部顧問の斉藤守二に教わります。斉藤守二の長男・斉藤和夫は東京とメキシコオリンピック大会に競歩選手として出場、引退後は石川県出身の競歩選手、池島大介や板倉美紀などの選手を育成しています。

三段跳は当時「ホップ・ステップ・アンド・ヂャンプ」と呼ばれていました。大島鎌吉は 2 年生の時に、棄権した上級生の代役として三段跳に出場、いきなり優勝します。

それをきっかけに大島は三段跳に専念します。斉藤顧問の専門的な指導の下、大島は厳しいトレーニングに励みます。跳躍力をつけるために重い砂袋を背負って登下校することもあったそうです。

才能は一気に開花します。 4 年生の時に出場した東西対抗陸上競技大会で、早稲田大学の織田幹雄と南部忠平に続き、13m57 の跳躍で 3 位となり、全国に名を知られるようになります。そして、この頃から先輩の織田幹雄、南部忠平は 4 歳年下の大島を「鎌ちゃん」と呼び、 3 人はしのぎを削るようになります。

そして、 5 年生の時、初の国際大会・極東選手権大会（上海）に出場、14m39 の記録で、見事銀メダルに輝きます。

実は、その 4 か月前、1927（昭和 2）年 4 月に「彦三の大火」が起こりました。金沢商業学校も全焼するのですが、大島は燃えさかる学校に近づき、校門に掲げられている「県立金沢商業学校」の門標を外して救ったのでした。

このエピソードは『金商七十年史』（1970 年）に大島が寄稿しているのですが、オリンピックのことよりもこの出来事を寄せた大島の母校愛がうかがわれます。

５．関西大学時代

1928 年（昭和 3）、大島は関西大学に入学します。金商時代の大活躍から、早稲田大学はじめ関東の多く大学から熱心な勧誘があったにもかかわらず、大島はあえて関西大学を選びます。

「関東ばかりが強くてはダメだ。東西の学校が競い合ってこそ競技力が高まる」という大島の反骨精神からのようです。

大島は大学を卒業してからもここで練習し、織田や南部も来て練習をしたそうです。ここは今、総合図書館になっているのですが、その片隅に大島鎌吉の自宅から移植された月桂樹があります。そこには「氏は生涯、オリンピックを通じて世界平和に捧げ、その功に対して、日本で最初の「オ

リンピック平和賞」が授与された」と刻まれています。

この大学でも、高校時代と変わらず、文武両道を貫いたそうです。練習も一生懸命、試合には全力、勉強も優秀で、ほとんどの科目で「優」だったそうです。

先輩からも後輩からも慕われ信望厚い大島は３年生で主将となり、理論的な練習を取り入れます。

ロサンゼルスオリンピック銅メダルの跳躍

６．大火傷を負いながらオリンピック・ロサンゼルス大会銅メダル

大島が大学１年の時のオリンピック・アムステルダム大会は国内予選会で走幅跳２位、三段跳３位で惜しくも出場できませんでした。その悔しさから大島は、織田や南部と共に関西大学のスタジアムでの練習に励みます。

そして、1932 年、この３人でオリンピック・ロサンゼルス大会に臨みます。三段跳は日本のお家芸で、金銀銅メダルの獲得も夢ではなかったそうです。

ところが、本番の４日前に、選手村宿舎のガス風呂が爆発し、大島は大火傷をおってしまいます。とても競技できる状態ではなかったようですが、大島は体中をぐるぐる巻きにした包帯を取り、ぶっつけ本番で決勝に臨みます。

そして、最後の６回目に 15m12 の跳躍をして、見事銅メダルを獲得します。

ところが、大島にはこのメダル獲得よりももっと惹きつけられるものがありました。『関西大学学報』（1932 年 10 月発行）にオリンピックから帰ってきた大島の報告文に驚かざるを得ません。

「近代オリンピックについて　大島鎌吉」と題して、「ギリシャのオリンピックを再現したのが近代オリンピックである。四ヶ年毎にこの平和の祭典が荘厳裡に挙行されて二週間の全世界の耳目は他の凡ゆる係争から完全に遮断されてしまうのだ。故にオリンピックは次のようなモットーを掲げる」と始まり、「オリンピックにおいて、重要なことは勝つことではなく、参加することです。・・・」という有名なクーベルタンの言葉を英文で紹介しています。

銅メダルを獲得したことや自分の競技には一言も触れていないのです。大島にはメダルよりもオリンピックの理想の姿を学んだことの方が大きかったようです。

なお、この時の銅メダルは残っていません。戦時中に大島夫人が軍に供出してしまったそうです。

７．オリンピック・ベルリン大会での秘話

ロサンゼルス大会の２年後、大島は毎日新聞社に入社します。運動部に記者として所属しながら競技生活を続けます。そして、15m82 の世界記録を樹立します。

そして、オリンピック・ベルリン大会では選手団主将兼旗手として三段跳に出場します。結果は６位でしたが、田島直人が金メダルを獲得し、日本は三大会連続で三段跳金メダルを獲得します。

この大会でこんなエピソードがあります。

それは開会式の入場での出来事。開会式は身長順で行進するそうですが、マラソンに参加する孫基禎（ソンキジョン）と南昇龍（ナムスンニョン）たち朝鮮人選手の後ろを歩くことになった陸軍出身の馬術の選手が「なぜ朝鮮人の後ろを歩かなくてはいけないのか！」と不満を漏らすと、大島は一喝。

「日本人も朝鮮人も同じ人間。オリンピックは平和の祭典だ。嫌なら立ち去れ！」

当時、大島は「跳ぶ哲学者」と呼ばれ、誰もが一目を置く存在でした。

この件以来、孫と大島は親交を深めます。孫選手はマラソンで金メダルを獲得しますが、優勝者に贈られたギリシャのカブトのレプリカを関西大学に寄贈、今も展示されています。

また、孫選手は金沢の経王寺にある大島の墓参にも訪れています。

東京オリンピック入場行進

８．科学的トレーニングの導入

今でこそ、「科学的トレーニング」というのは常識になっていますが、日本で初めて導入したのは大島鎌吉と言っても過言ではないでしょう。

ベルリン大会期間中に、大島は事務局長であったカール・ディームと面会します。ディームは聖火ランナーを初めて実現させたり、オリンピックを世界中の青少年に観戦させたいとユースキャンプを実施した人物です。大島は人生の師として仰ぎ、大きな影響を受け、オリンピック運動として実践していきます。

ドイツ語に堪能な大島はディームと通訳なしで、「インターバルトレーニング」などの科学的トレーニングについて聞き出します。また、人工土「アンツーカー」も譲り受けます。この経験が幻となった 1940 年の東京オリンピックや 1964 年東京オリンピックの準備にもつながっていきます。

9．従軍記者としての大島

大島は 1939 年から 1945 年 8 月 1 日までの 6 年近く、一度も帰国することなく、ドイツで従軍記者として取材を行います。なぜドイツで、そして敗戦直前にどのようにして帰国したのかというのもハラハラする話です。

決死の覚悟で最前線を取材する大島ですが、その合間にアドルフ・ヒトラーとも会見します。その内容はおそらくドイツの青少年活動やレクリエーション運動について聞き出したものと思われます。戦後のレクリエーション運動、みんなのスポーツ運動と関連する話です。

また、すでに欧州のオリンピアンと親交のあった大島は彼らを訪ねながら取材を重ねています。ここに、大島ならではの幅広いコネクションを見受けることができますし、悲惨な戦場の取材が大島の平和思想の原点であり、後のスポーツと平和の運動につながっていくのです。

10．金沢市での国民体育大会

戦後、大島は毎日新聞東京本社勤務となります。政治部を経て運動部配属となった大島は大日本体育会（のちの日本体育協会、現在は日本スポーツ協会）において国民体育大会の開催を模索します。

そして、1947 年第二回国民体育大会が金沢市を中心に行われます。また、大島の提唱により、第一回全国レクリエーション大会も同時開催され、昭和天皇臨席のもと「若い力」のマスゲームが初めて公の場で演技されたのもこの大会です。

この年に大島は毎日新聞に『スポーツ界の展望』、北國新聞社の文芸誌『文華』に、「スポーツは大衆に基盤を持って育成せよ」「余暇を善用して楽しむスポーツでなくてはならない」と、国民はスポーツをレクリエーションとして楽しむ必要があると訴えます。この「大島アピール」は大島思想の根幹となるものです。

そして、大島は「レクリエーション運動」「ワンダーフォーゲル運動」の推進に取り組みます。

11．スポーツ少年団の創設

敗戦国となった日本とドイツは、国際オリンピック委員会や国際競技連盟から除名処分を受けます。しかし、大島は見事な外交術で学生スポーツ復帰の承認を得ます。

その他にも日本ユニバーシアード委員会の設立にも携わります。

しかし、そういったことを自慢話にせず、要職にもつかない、そういう大島の人物の大きさに、誰もが敬服したようです。

大島は戦後のドイツと日本の復興を「スポーツや青少年育成」の面で大きくかけ離れていることを日々、感じていました。

・・・ドイツと日本とでは、国民のスポーツ実践者やスポーツクラブの数が何倍も違う。そう

いう会員以外にも多くの国民が日常的に散歩をしている。それに比べて、日本は「もはや戦後ではない」と経済発展こそすれ、国民が心身ともに豊かで健康な生活を過ごしているようには見えない・・・

大島語録の中に「日本は病棟列島になってしまう」「技術革新のマイナス防止を怠るな。怠る偸安（とうあん：安楽をむさぼること）を許すな」と生涯、口癖にしていた言葉があります。大島は青少年の育成のための環境を整えたり、指導者を育成していくスポーツ施策を行うことが急務であると考えます。

そして、横浜市健民少年団とドイツのスポーツ少年団の交流を通して運動を推進し、1962 年「日本スポーツ少年団」を結成します。

今、全国で何十万人も所属する「日本スポーツ少年団」の設立には、このように大島が大きく関わっているのです。

12. 東京オリンピック招致と選手強化

第 18 回東京オリンピック開催が決まる半年前、とんでもない事件が起こります。「日本オリンピック後援会」事務局が資金を遊興費などに使い込むという横領事件です。

そして、日本体育協会会長、理事、JOC 委員、幹事たちが総辞職してしまいます。

オリンピック招致運動が窮地に陥る寸前のところ、大島は過去のメダリストに連絡して「オリンピック・メダリスト・クラブ」を結成します。そして、世界中のスポーツ関係者やメダリストに挨拶状を送り、招致を促します。

また、大島は本部長の田畑から「ソ連をはじめとした東欧諸国の招致運動」の要請を受けます。そして、入国困難な東欧諸国を回り、見事に東欧六カ国の IOC 委員が持つ 8 票中 7 票を獲得します。

東京オリンピック開催が決定すると、大島は田畑から「選手強化対策副本部長」を頼まれます。そして、大島は『選手強化五ヶ年計画』を策定。それまでの日本スポーツの欠陥を分析し、スポーツに「科学」を導入したトレーニングを推進します。また選手の発掘と育成、専任のコーチ制度、世界の著名な各競技のコーチや学者を次々と招聘し、選手強化に努めます。

東京オリンピックを一年半後に控えた 1963 年 4 月に辞任した田畑に代わって、大島は本部長に任命されます。そして、日本の「金メダル獲得目標数は 15 個」と宣言し、周囲を驚かせます。そして、本番では見事に過去最高の「16 個」の金メダルを獲得します。

現 JOC 会長の山下泰裕氏は「2020 東京オリンピックの日本の金メダルは 30 個」と宣言しました。オリンピックの他にも世界選手権や世界ランキングがある現在とは違って、当時、メダル獲得宣言をするには相当、緻密な分析がなければできなかったことでしょう。

13. 平和の祭典オリンピック

「1964 年の東京オリンピック聖火リレーランナーは、高校生たち若者を中心にする」ということを提唱したのも大島でした。

原案では、各自治体の首長や議員、財界有力者、スポーツ功労者だったそうです。それに異を唱えたのは大島でした。最終聖火ランナーに推されていた織田幹雄らも賛同しました。

最終聖火ランナーは、1945 年 8 月 6 日広島に原爆が投下された日に生まれた早稲田大学生の坂井義則。「オリンピックと平和」にふさわしい人物です。

坂井を指名したのは大島ではないかもしれませんが、少なくとも大島が「聖火ランナーは明日の日本を担う若者に」と言わなかったら実現しなかった話となります。

そして、大島は 410 名の日本選手団団長にも任命され、開会式では国旗を手に入場します。東京オリンピック選手強化対策本部長として、選手団長として、日本選手団を鼓舞し「東京オリンピックをつくった男」大島鎌吉が、金沢市出身であったことをもっと市民・県民に知ってもらいたいと思います。

そして、東京オリンピックは感動的な閉会式で幕を閉じました。各国の選手が入り交じって入場してきたのです。中継を担当する NHK は 60 ページにも及ぶ絵コンテを用意し多くのテレビカメラを構えていましたが、全く想像していなかった光景に担当していた片倉ディレクターは「えらいことになった」と思ったそうです。

しかし、これが「平和の映像」だったのです。土門アナウンサーは「まことにすばらしい光景であります。世界は一つであります」と奇跡の瞬間を伝えました。

後日、大島は片倉にこう言ったそうです。「世界平和のためにオリンピックが必要だというのは、ああいうことなんだよ」

14. 「みんなのスポーツ」運動

東京オリンピックの金メダルの数は大島の公言通り 16 個で世界第 3 位の成績でした。現場のひたむきな精進・努力があって、地の利もありました。

しかし、銀と銅メダルまで含めた数を人口で割ると、10 位に後退します。「日本はまだまだスポーツ後進国にある」と考えた大島は、東京オリンピック開催を日本の「スポーツ元年」と位置づけ、2 つの大きな仕事に取り組みます。

翌 1965 年に「体力つくり国民会議」を発足させます。そして、ドイツのスポーツ政策にならった「みんなのスポーツ」をさらに推進していこうとします。

欧米で発展した「レクリエーション運動」、ドイツ由来の青少年野外活動「ワンダーフォーゲル運動」、生涯スポーツを推奨するノルウェー発祥の「トリム運動」などを次々と日本に紹介します。

生活の中にスポーツを取り入れていこうするとスポーツ団体、組織は今も地道に活動を続けています。その種をまいた一人が大島鎌吉と言えるでしょう。

15. オリンピック平和賞受賞

1980 年、ソ連のアフガニスタン侵攻に対し、米国はモスクワオリンピックのボイコットを決め、西側諸国に同調を求めました。大島は「政治がオリンピックに介入すべきではない」と権力に立ち向かいます。大島は 5400 字にも及ぶ『JOC 重大決意の日来る！ここで考えよう！！』と題した「大島アピール」を作成します。そして、英語とドイツ語に翻訳し、国際オリンピック委員会だけでなく、各国際競技連盟、さらに 124 か国のオリンピック委員会へ送付してボイコット反対を訴えます。

結局、日本は不参加を決定しますが、イギリスやフランス、イタリア、スペインは参加します。「モスクワオリンピックで平和の芽が残るのか、ぜひとも観たい」と大島はソ連大使館に掛け合って、VIP 扱いでソ連に入国します。これまたコスモポリタン大島ならではの業です。

大島は各競技をくまなく視察し、西側諸国が国旗掲揚と国歌演奏を行わず、五輪旗と五輪賛歌を使用していることに感動します。

この年に大島はオリンピックメダリストであり、ノーベル平和賞受賞者のノエル・ベーカーと意見交換を交わします。この対話が、大島のさらなるスポーツと平和の運動を推進します。

大島が好んだノエル・ベーカーの口癖は「この核の時代に、人類にとって最大の希望はオリンピックが存在することである。オリンピックこそは史上最大の平和運動である」という言葉だそうです。

そして、「政治がスポーツを利用すべきではない」と訴えたことなどを理由に、1982 年、大島はアジア人で初めて「オリンピック平和賞」を受賞します。その授賞式で大島は「アフリカでオリンピックを開催しようじゃないか。そして、本当の五つの輪をつくろうではないか。そのためにもこの草の根オリンピック運動に結集しようではないか・・」と力強くスピーチをします。オリンピック平和賞のブロンズ像は現在、関西大学におかれています。

16. 金沢市小立野に眠る大島鎌吉

1985 年 3 月 30 日、大島鎌吉は 77 歳で永眠します。法名は「雄躍院芳薫日鎌居士」で墓は金沢市小立野の経王寺にあります。2019 年 12 月に大島家の親族の方々によって、墓の横に顕彰碑が建てられました。

NHK 大河ドラマで東京オリンピック招致に関わった田畑政治が取り上げられていました。彼は水泳の指導者であり、1964 東京オリンピックを招致した人物です。田畑は「優秀な選手を育てれば競技の普及は図れる」という考えです。しかし、大島は「スポーツの底辺を拡大することが大事」という考えです。相反する考えの 2 人ですが、東京オリンピックの招致と運営に関しては協力し合っていたからこそ、オリンピックが開催されたのです。

2020 東京オリンピック開催は延期となりましたが、これを機に、真のオリンピック運動とは何か、そんなことを考えてみませんか。

金沢市小立野の経王寺　墓石隣にある顕彰碑

文章協力　大島鎌吉スポーツ文化金沢研究会